

嵐の中でそよ風の存在に耳をかたむける―村上春樹と新世代の日本人の精神世界

川端康成の描く日本は雪よりも白い少女らがそぞろ歩きする雪国、夏目漱石の描く日本は美しい月光の流れる静かな小道、太宰治の描く日本は質素で誠意がある田舎者が勤勉に努力する浄土……

各世代の日本の文豪達は、手にしたペンで日本人の心の底に特有なきめ細かい哀愁を述べ表すと同時に、日本のロマンチックで古風な、静かで精巧な文化の基調を築いてきた。私達が「日本」という言葉を口に出すとき、脳裏に浮かぶのは恐らく桜の舞い落ちる中庭、三味線を伴奏に舞い始める舞妓、あるいは「神奈川沖浪裏」の豪胆で簡潔な線だ。しかし、こうした濃厚な昔の風俗習慣は、日本という資本主義の強国の今の精神状態だろうか。

ネイティブアメリカンの古語に「私達の歩みが速すぎて、魂がついてゆけない」というものがある。知っておくべきなのは、日本は続けざまに原子爆弾の爆撃を受けた国であり、乾パンを口にした米兵に管制されていた国であり、「地下鉄の中で居眠りをする勤め人のために用意する」ファーストフードのインスタントラーメンが発明された国でもあることだ。第二次世界大戦が終わってからの70年、欧米の技術、文化、資源の衝撃のもとで、日本の経済は急速に発展し、鉄筋コンクリートのビルが切り立って、近代的な交通機関に乗せられた人の流れが織りなす頻繁な往来は巣の中を駆け回るアリよりも複雑で迅速でさえある。そのランチョンミートの缶詰のように地下鉄に押し込まれた人々に、落ちた花に対してものあはれを感じる気持ちが持てる暇はあるのだろうか。頭を上げると米国の輸送機が赤い光を点滅させて夜空を飛ぶのが見える人々が、そばにいる恋人に「月が綺麗ですね」などと言えるものだろうか。日本は欧米の文化の大きな流れに巻き込まれる中で転げ回りながら進み、その速さはいくぶん慌ただしい足どりだが、日本人のやさしくきめ細かい心は、本当について行けるものだろうか。

当然、ついて行けない。日本人は70年よろめき歩く中で、実は困惑していた。この時代の日本は、ひねもすバーでビールをがぶ飲みする若者、夜中に安眠できず街頭をぶらついて女の子と身分証の不要な宿を探す若者、小型SUVを海岸へ走らせて海に叫んだりぼうっとしたり身を躍らせて飛び込んだりする若者が多くいた。こうしたあれこれは、戦後の新世代の日本人の精神状態で、村上春樹の描く日本の精神状態でもある。

和服、清酒、扇子、三味線……こうした日本の最も典型的な文化のシンボルは、村上春樹の作品ではほとんどお目にかからない。日本の国花の桜にさえ単なる桜に過ぎず、散っても何らものあはれは帯びていない。村上作品を読んでいると、米国の「困惑の世代」や「失われた世代」の作家の作品を読んでいるような気にさえなるだろう。ビール、ピザ、道路、フォルクスワーゲン、セブンスター、ジャズ……そうしたものこそが村上作品の中で描かれる典型的なイメージだ。当然、それらは戦後の日本の若い人が最も多く接触していたもので

もある。

村上春樹の処女作『風の歌を聴け』は彼の全作品の無頓着、自由な基調を打ち立て、また村上が典型的な古くからの風情を描写する作家ではないことを宣言した。小説は主に 1970 年の夏の日本のある街を描いており、大学卒業の近い「僕」と「鼠」がバー、街頭、彼らが「家」と仮称する場所でさまざまなものと出会う。当時の日本各地では冷戦構造に反対する「全共闘」運動がかなりの勢いで行われていたが、二人はデモ隊に入ることもなく、のんびりとプールサイドで冷えたビールを飲みながら小説を書く計画を話しては、それまでの彼女を思い出していた。ただのんびりしているその背後には、言葉にならない焦りと孤独がある。「鼠」の父は武器商人で、「鼠」は極力その束縛から抜け出そうとしていた。彼と日本上空を旋回する米軍の P-38 戦闘機は、二人にとってこの夏の日差しの中の薄雲だった。彼らはまさに二人の嫌悪する圧迫、貪欲、強権主義を代表していたが、影が形に添うように二人の生活にあふれていた。

では、強権主義の圧迫のもとに置かれていた二人はどのように情熱をかき立てて学生運動の陣営の抗争に加わらなかったのだろうか。それには村上作品の重要な命題のひとつ、徒勞について言及することになる。村上の別の代表作『ノルウェイの森』では、主人公ワタナベの寮の前で、年を取った教師と角刈りの学生が毎日のように早起きして、きっちりと国歌を演奏して国旗を掲揚し、「真面目に日の丸に敬礼」して国家に対する心からの愛、国家の尊厳を守る決心を表していた。しかし、それほど厳かな儀式を目にしたのは、騒ぎで起こされて布団の中から乗り出したワタナベ以外にいただろうか。誰が関心を向けたらうか。毎日この儀式を機械的に繰り返し、日本は本当に冷戦の渦の中から、強権主義の圧迫の中で立ち上がれるだろうか。たとえすべての日本人がその学友のように愛国心を燃やしていたとしても、日本上空の米軍戦闘機が急降下したときに、その手にした日の丸を掲げられる人が何人いるただらうか。村上の短篇小説集に『回転木馬のデッド・ヒート』というものがあるが、その題名には「何も顧みず前へ前へと駆け回り、最後にはもとの場所に帰る」という意味が含まれている。村上目の当たりに見たのは、戦後というとても長い時間の中で自由に憧れる日本の若者が強権の圧迫のもとで必死にあがいても、得てして最後にはなすすべなく倒れるほかない状況だった。自由に憧れながら、自分の生活の中で得られる自由は実際には視野外のもっと範囲が広い、もっと強い圧迫と束縛から制限されていることに気づくのは、日本の若者にとって、無言の監禁宣告である。ちょうど欧米の文化が戦後の国際社会による日本への管制政策と共に輸入され、米国の 1940~50 年代の「困惑の世代」や「失われた世代」の文学が日本の若者が内心の戸惑いを託す新たな世界となり、ウイスキーを飲んでため息をつく若者がそうして日本の街頭に現れて、村上作品にも姿を現した。

『風の歌を聴け』は初期の「青春三部作」の第一作である。三部作の完結篇『羊をめぐる冒険』では、「鼠」が心の中を打ち明けている。「俺は俺の弱さが好きなんだよ。苦しさや辛さも好きだ。夏の光や風の匂いや蝉の声や、そんなものが好きなんだ。どうしようもなく好きなんだ。」この日差しがこぼれるような台詞は、どれだけ日本の若者の自由な生命、思う

ままに行動できる個人への内心から発する渴望を述べていることか。しかし、この超現実主義の小説には悲劇の結末がある。「鼠」の体内に世界を制御できる力をもたらすが、限りない野心で彼を飲み込んでしまう羊が宿った。強大な力と純真な心の間で、「鼠」は後者を選んだ。彼は毅然として自殺し、その限りなく貪欲な野心を彼の生命と共に世の中から永遠に断絶させたのだ。この結末は、すべての自由な意志を圧殺して、すべての欲求の赤裸々な増長を放任する強権主義に対する村上の不倶戴天の決意、そして青年の内心世界の強靱な最低ラインに対する察知と同意をも表している。たとえこの世界に絶望するような変えられない事実がいくつかあっても、たとえ自由を求める過程が徒労に過ぎないかもしれないとも、日本の若者は自分が死守すべき最低ラインを持っている。その最低ラインは賞賛に値する。新世代の日本民族が戦後の世界の入り組んだ闘争の中で自身の気骨を維持する最低ラインでもあるからだ。

『羊をめぐる冒険』の中の「羊探し」のみならず、村上作品にはそれぞれ探し求めるイメージがある。いなくなった猫、ひっそりと立ち去った伴侶、かつての出会い、失った記憶……実は村上本人も探求者で、彼が探し求めているのはまさに新世代の日本人の心の奥底の微細な動悸なのだ。この世界が欲求駆り立てられ、荒れ狂う風に人々が窒息しているときに、村上は俯いて、耳をそばだてて新世代の日本の青年の心の奥底のゆっくりとしたそよ風を聞くことができる。このことは、日本という機械のように高速運転している資本主義国が喜ぶに値する小さなやさしさでもある。